女優の過ち

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女優の過ち

【Ｎコード】
Ｎ５９３４Ｕ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
新島奈緒は美人でクールな女優として知られていた。しかしある番組で物凄いことをしてしまい。こうした女優さんは多いかも知れません。

第一章

女優の過ち

新島奈緒は美人女優として知られている。
はっきりとした二重の切れ長の目に奇麗な形の鼻、ややホームベース型の顔の肌は奇麗でしかもすらりとしている。見事な黒髪をブローにしている。
しかも長身で一七四はある。その背でも目立っていた。
その彼女は最近女優業だけでなくだ。バラエティ番組にもよく出演していた。この時もだ。
マネージャー、彼女よりは二十センチ以上低い細い赤茶色がかった髪をショートにし唇がやや厚くアーモンド形のきらきらとした目をしている女がだ。こう彼女に話した。
「今度は船よ」
「船？あの万景観号ですか？」
「その船に乗ったら生きて帰れないわよ」
マネージャーはその高い声で奈緒に告げた。
「乗りたいの？あの国に行ったら否が応でもダイエットできるけれど」
「いえ、遠慮します」
それはいいという奈緒だった。
「まだまだ美味しいもの食べたいですから」
「その船じゃないから安心してね」
そうした甚だいかがわしい船ではないというのだ。
「普通の船よ」
「普通のですか」
「それに乗ってね。魚を釣るのよ」
「鮫でも釣るんですか？」
「シーラカンスよ」

それだというのだ。南アフリカ沖にいる古代からいる魚だ。所謂生きた化石である。それでよく知られている魚なのである。
「それよ」
「シーラカンスって」
「それを釣りに行くっていう企画だけれど」
「何か面白そうですね」
「受ける？この仕事」
マネージャーはあらためて奈緒に尋ねた。
「そうする？どうするの？」
「御願いします」
こう答えた奈緒だった。
「釣りはしたことないですけれど」
「わかったわ。それじゃあね」
「はい、わかりました」
こうしてだった。彼女はそのシーラカンスを釣る仕事を受けたのだった。とりあえず変わった魚を釣るとしか考えていなかった。
そのいささか能天気な考えのまま一旦南アフリカに行きレンタルしておいた船に乗って南アフリカ沖に向かった。無論マネージャーも一緒だ。
船はあまり大きくない。普通のクルーザーである。長身の彼女からしてみればだ。その大きさの船はどうかというとだった。
「何か怖いですね」
「頭ぶつけそうなのね」
「実際にもうぶつけちゃいました」
こうマネージャーに話すのだった。困った顔で頭を押さえながら。
「さっき。下に降りた時に」
「もうぶつけたの」
「気をつけないといけないですよね」
「気をつけてね。若し落ちたらね」
「危ないですよね」

「シーラカンスを釣る仕事だけれど海で泳ぐ仕事じゃないのよ」
今はだ。そうした仕事ではないというのである。
「だからね。いいわね」
「わかりました。それなら」
「あんた私と違って大きいから」
何気に自分が小柄なことを言うマネージャーだった。
「気をつけてね。バランス崩したらね」
「それで終わりですね」
「そうよ。あとは」
「あとは？」
「救命胴衣忘れないでね」
それもだとだ。忘れるなというのである。
「さもないと。落ちた時にね」
「大変なことになりますよね」
「下手したら死ぬわよ」
溺れてという意味である。
「そうなりたくなかったらね」
「わかりました。それにしても」
「それにしても？」
「ここって凄い海ですよね」
周りを見回して言う奈緒だった。見渡す限り濃厚なマリンブルーの海である。宝石の様なその色を見てマネージャーに言ったのである。

第二章

「何が出て来てもおかしくないですよね」
「だからシーラカンスがいるのよ」
「いえ、シーラカンスだけでなく」
「他に何が出るのよ」
「例えば恐竜とか」
話に出すのはそれだった。
「そういうのが出て来ても」
「それ、面白そうね」
いささか真面目な顔で答えたマネージャーだった。
「恐竜が実際に映像になったらね」
「結構凄いですねよ」
「凄いなんてものじゃないわよ。世紀のスクープよ」
マネージャーも話しているうちにだ。目を輝かせていた。
「あんたの知名度もあがるわ」
「ですよね。それが出たら」
「まあ普通はないけれどね」
流石にだ。それは否定したのであった。
「幾ら何でもね」
「やっぱり。そんなことは」
「そうそう、それよりもまずはね」
「御仕事ですね」
「シーラカンス釣ってね」
そのことを告げるマネージャーだった。
「気合入れて釣ってね」
「わかりました。それじゃあ」
こうした話をしてだ。奈緒はだ。
オレンジの救命胴衣を着てそのうえでだ。そのマリンブルーの海

の中に釣り糸を垂らしたのである。こうして番組の企画がはじまった。
暫くしてだ。早速だった。
釣り糸に反応が来た。奈緒は笑顔で糸を戻しはじめた。
「まさか。もうですか？」
「そうかもね。きたかもね」
マネージャーも言う。周りのスタッフ達も喜色を浮かべる。
「シーラカンスね」
「もう来るなんて運がいいですね」
「本当にね。とにかくね」
「はい、釣り上げてみます」
こう話してだ。釣り糸を巻き続ける。
するとだ。海の中から出て来たのは。
その魚だった。手足の如き鰭を持っただ。その魚だった。雇った現地の漁師達がだ。その変わった形の魚を見て口々に言うのであった。
「ゴンベッサだ」
「ああ、ゴンベッサだ」
「ゴンベッサ？」
その名前を聞いてきょとんとなる奈緒だった。その彼女にマネージャーが説明する。
「シーラカンスのことよ」
「それをそう呼ぶんですか」
「そうよ、現地ではね」
即ちここではというのである。
「そう呼ぶのよ」
「成程、そうだったんですか」
「いや、本当に運がいいわね」
マネージャーはその奈緒とシーラカンスを見ながら感心したようにして述べた

「もう釣るなんてね」
「ですよね。私もそう思います」
「ここまで運がいいとね」
どうなのか。マネージャーは笑いながらこんなことも話した。
「あれね。また何か起こりそうね」
「何かっていいますと」
「例えば奈緒ちゃんが今言ってた」
彼女の話を受けてだ。こう話すのだった。
「あれよ。恐竜が出たりとか」
「それがですか」
「実際にあったりとかね」
笑いながらだ。こう話すのだった。
「それがあるかもね」
「そうですよね。ひょっとしたらね」
奈緒もだ。マネージャーに対して笑って話すのだった。
「出て来るかも」
「そうよ。一体何が出て来るのかね」
「まあもう一匹釣れたら面白いですよね」
「確かにね。じゃあもう一度ね」
「はい、釣ってみます」
その釣ったシーラカンスをだ。一旦水槽の中に入れた。

第三章

そしてそのうえでもう一度釣り糸を海の中に入れようとした。しかしだ。
その時だ。彼女の、いや船の前にだ。とんでもないものが出て来た。
恐竜ではなかった。残念ながらそれではなかった。だがそれは。
まさに幻の存在だった。マネージャーがそれを見て言うのだった。
「あ、あれは！？」
「で、ですよねあれって」
「あの噂の」
「小説にもなった」
テレビ局のスタッフ達も唖然となって言う。
「白鯨じゃないですか！」
「モビーディッグ！」
「実在したなんて！」
「嘘でしょ、本当に」
マネージャーはその目を大きく見開きながら叫ぶ様にして言った。
「あんなのが出て来るなんて」
「大きいですよ、あれ」
「五十メートルありますよ」
「マッコウクジラなのに」
マッコウクジラは普通は二十メートル程だ。しかしだ。
そのマッコウクジラ、白いそれは五十メートルはあった。普通は考えられない大きさである。
それを見てだ。マネージャー達は腰を抜かさんばかりに驚いているのだ。
現地の人達もだ。大騒ぎになっている。
大急ぎで船を動かしだしてだ。それでだった。

白鯨から去ろうとする。皆シーラカンスどころではなかった。
テレビ局の面々はその中でも仕事をしている。何とかカメラを回してその白鯨を映像に撮っている、ところがその中でだった。
奈緒はだ。平気な顔でだ。その海から出ている白鯨を見ながらこう言うのだった。
「あっ、白鯨ですね」
「そうよ、白鯨よ」
「珍しいですよね」
こうだ。落ち着いた顔でマネージャーにも話す。
「白い色の鯨なんて」
「それだけ！？思うのは」
「大きいですよね」
カメラの中でだ。白鯨を見ながらだ。落ち着き払っていた。
「あんな大きい鯨っているんですね」
「だから本当にそれだけ！？」
奈緒にだ。さらに問うマネージャーだった。
「あんたあの鯨にそれだけしか思わないの」
「ですから」
本当にだ。何でもないといった調子である。
表情は穏やかですらある。本当に何でもないといった調子だ。
その顔でだ。彼女は言うのであった。
「白くて大きな鯨ですよね」
「あのね。白鯨って聞いて何とも思わないの？」
「何かって？」
「白鯨って知らないの？」
メルヴィルの代表作である。アメリカ文学の名作の一つでもある。
「あの小説」
「何ですか、それ」
これが彼女の返答だった。
「知らないですけれど」

「白鯨知らないって」
マネージャーはこのことにも唖然となった。実は奈緒はこれまでは水準レベルの知識は備えていると思っていたからである。
白鯨は誰でも知っていると思っていた。しかしなのだった。
彼女は知らないのだった。その白鯨をである。そのことに驚いた。
だが、だった。マネージャーはそれにめげずにだ。今度はこう話したのだった。
「ビッグワンって知ってる？」
「王監督の現役時代のことですか？」
「何でそこで王さんなの？」
「ソフトバンクファンですから」
こうテレビの前で落ち着いて話す。実際に彼女はソフトバンクファンである。それもダイエー時代からの古いファンであるのだ。
「ですから」
「それだと秋山さんじゃないの？」
マネージャーも話を合わせる。実は彼女もソフトバンクファンだ。ただし彼女は九州生まれだからそうであって奈緒は東京生まれだ。
「ホークスだと」
「そうなります？」
「まあ王さんもそうだけれど」
それは否定しなかった。しかしであった。

第四章

マネージャーがここで言うビッグワンはだ。背番号ではなかった。
「漫画であったけれど」
「漫画ですか？」
「そうよ、藤子不二雄先生の漫画よ」
そちらだというのである。
「知らないの？」
「ええと、ドラえもんじゃなくて」
「それとは別によ。描いてたのよ」
隠された名作である。この漫画にも巨大な白鯨が出て来るのだ。
「昔ね」
「そうだったんですか」
「それ、知らないわよね」
「怪物くんとかエスパー魔美なら知ってますけれど」
しかしその作品は知らないというのである。
「そんな漫画もあったんですね」
「そうよ。とにかくね」
「あの白鯨何かあるんですか？それで」
「海の王者なのよ」
それだとだ。マネージャーは話すのだった。
「早くここから立ち去らないと大変なことになるわよ」
「鯨って船とか壊すんですか？」
「あの鯨は特別なのよ」
マネージャーはそうした小説や漫画から話している。そうした作品では白鯨はだ。船を破壊し船乗り達の恐怖の象徴となっているのだ。
「それこそ船でも何でもね」
「壊されるんですか」

「そうよ、もうシーラカンスどころじゃないわよ」
正直なところ生きる化石なぞ問題でなくなったというのだ。
「いいわね、立ち去るわよ」
「そうするんですか」
「ええ、それじゃあね」
「折角シーラカンス釣ったのに」
「そんなの早く海に返しなさいっ」
本当にだ。それどころではないというのである。
「いいわね、早くよ」
「わかりました。それじゃあ」
奈緒は残念な顔で自分が釣ったシーラカンスを海に返した。そして船は。
全速力でその場を後にした。幸いなことに白鯨は何もしてこず追っても来なかった。彼等は危ういところを逃れたのであった。
ところがだ。この時のことが放送されてだ。
奈緒の評価がだ。一変してしまったのだった。
視聴者達はだ。彼女をこう評するようになった。
「天然だよな」
「あれじゃないのか？」
「抜けてるっていうか」
「白鯨知らないのか？」
「メルヴィルの小説全然知らないんだな」
「常識だろ」
誰もが知っている、だからこそ言うことだった。
「そういえば出身校ってあれだったな」
「ああ、県内有数のあれな学校だったよな」
「じゃあやっぱりな」
「全然もの知らないんだな」
こんなことまで言われネットで書かれるようになった。しかも出身校のことは紛れもない事実だからだ。否定のしようがなかった。

「まああの漫画は古いけれどな」
「けれど。あの小説は普通知ってるだろ」
「白鯨って世界中の皆が知ってるお約束なのにな」
「それを知らないで言うか」
「本当にあれだな」
こう話をしてだった。彼女の評価が定まった。
あれだとだ。奈緒はこのことを聞いて甚だ不満だった。
「私あれじゃないのに」
「じゃあ本能寺の変は何時なの？」
「一一九二年です」
「それ鎌倉幕府の年だから」
マネージャーは彼女に質問を出してからすぐに答えた。
「全然違うじゃない」
「確か赤穂浪士が討ち入りした事件ですよね」
「それも全然違うから」
ここでわかった衝撃の事実だった。

第五章

「じゃあ森鴎外の代表作は？」
「誰ですか？それ」
今度はこれだった。
「一体。誰なんですか？」
「明治、大正の文豪よ。医者でもあったのよ」
その医者としての実績は脚気において脚気菌があると主張して陸軍の兵達に白米を食べさせて多くの脚気患者と死者を出したものがある。
「知らないのね、本当に」
「ええと、まあ」
「だから。はっきり言うけれど」
「言うけれど？」
「ドラマの台本の漢字も全然読めないし」
それでマネージャーの彼女がルビを振っているのだ。漢字を読めないからそれでしているのだ。それもマネージャーの仕事になっているのだ。
「それじゃあね」
「今の評価は仕方ないですか」
「そうよ。それでね」
「それで？」
「そのことでよ」
そのあれだということについての話になった。
「仕事の依頼が来たわよ」
「ドラマですか？」
「ドラマは次のシーズンよ」
今ではないというのである。
「それとは別の仕事よ」

「ええと。またバラエティですか？」
「クイズ番組よ」
それだというのである。
「クイズ番組ね。それよ」
「何でクイズなんですか？」
奈緒はマネージャーのその話を聞いてだ。きょとんとした顔になった。
そしてそのうえでだ。彼女に問うのだった。
「ですから私、あれなんですよね」
「あれだからよ」
「あれだから？」
「だからクイズ番組の話が来たのよ」
マネージャーは落ち着いた顔で話す。
「つまり。クイズで回答してね」
「はい、それで」
「そこであれな回答を出して」
話が具体的なものになってきた。
「笑わせることが目的よ」
「視聴者の人をですね」
「そう、だから話が来たのよ」
つまりあれな回答で他人を笑わせろというのである。
「わかったわね」
「わかりました。それでなんですか」
「それでどうするの？」
マネージャーはここまで話してあらためて奈緒に尋ねた。
「この仕事受けるの？」
「お仕事でしたら何でも」
これが奈緒の信条だった。こうした仕事は何時仕事が途絶えるかわからない。だからこそ仕事の話があれば何でも受ける、そうした考えなのだ。

それでだ。彼女は答えたのだった。
「引き受けさせてもらいます」
「わかったわ。じゃあ受けるってことでね」
「御願いします」
「じゃあ。期待してるわよ」
マネージャーは微笑んだ。そのうえでの言葉だった。
「珍回答をね」
「やらせてもらいます」
こうしてだった。奈緒はだ。あらたな境地を開いたのだった。
以後彼女は演技はいいがあれな女優として知られるようになった。
それは彼女にとっていいことだった。少なくとも悪いことはなかった。

女優の過ち　　完

２０１１・３・２５

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5934u/

女優の過ち

2011年7月4日03時11分発行